

町史だより

米軍からみた

沖縄戦

今月二十三日は「慰霊の日」。

みなさんはこれまで「慰霊の日」をどう過ごし、また沖縄戦をどのように感じてきたのでしょうか。

今回は、米軍の戦闘記録(注①)から、西原の沖縄戦をたどってみたいと思います。

西原での地上戦は、棚原(上原)和宇慶(中城村)の丘陵線をめぐる日米両軍の攻防から始まります。日付は一九四五年四月十九日。

ここを米軍は「スカイライン丘陵」と名づけました。進撃する米軍は、和宇慶高地のふもとで日本軍の集中攻撃を受け、くぎ付けにされました。元の陣地へ引き返す米兵の様子が次のように述べられています。

「そのうちの一人は安全地帯めざして無我夢中で駆けていたが、なにを思ったか、突然、止まり、ひざまずいて神に祈る格好をとった。とたんに彼は、迫撃砲の直撃をうけ、肉片となって四方に飛び散った。」

この日だけで、米兵の死者は一〇〇名に達していたようです。また、



—スカイライン丘陵(棚原)の旧日本軍陣地壕入口—

四月二十二日に、米軍は「スカイライン丘陵」一帯で、壕内にきちんと並べられた日本兵の死体約五〇〇体を確認しており、この丘陵で壮絶な闘いが行われ、多くの命が失われたことがわかります。

千原にあるイシグスクでも激しい戦闘が展開されました。

このグスクを米軍は「ロッキ・クラブ(岩山)」と呼んでいました。

その後米軍は、南へと進撃して行きます。その間、米軍は西原の丘陵に様々な名をつけています。小波津にあるマヤ・モーを「煙突山」、現在小波津団地として造成されたユツキー・モー・アカモーはそれぞれ「ウイリアム」「タール」といった具合。

「煙突山」は、西原村営火葬場があった丘で、きつと煙突が顔を出していたことにちなむのでしょうか。

さて、西原の顔ともいうべき運玉森に、米軍はどんな名をつけたのでしょうか。

その名は「コニカル・ヒル(円すい形の丘)」。

米海軍は「コニカル・ヒル」を攻撃するのに、中城湾(米軍は「バツクナー・ベイ」と呼んだ)から、多量の砲弾を撃ち込んだため、兵隊たちはこの山を「百万ドルの山」とも呼んでいたようです。

ものすごい量の艦砲射撃であったということは、町内の戦争体験者のお話し(注②)からもうかがえます。また、戦後、運玉森は不発弾の自然発火により、たびたび山火事が発生したようです。

その「コニカル・ヒル」に近い池田の「ラブ高地(チカジョーモー)」では、逃げ込んだ墓で、避難民の老婆から水をわけてもらったという米兵の話もあります。

このような事実はもつとたくさんあったことでしょう。

しかし、それを語る「人」がいなければ事実はみえてこないともいえる。



スカイライン丘陵(上原)の壕内遺品(ガーゼの入った薬品ビンもある)

語る「人」が誰であれ、沖縄戦で、この西原の地でなにかあったのかという事実は知っておきたい、と思うのです。

みなさんも、身近に語る「人」がいらっしゃるのなら、どのような事実があったのかたずねてみてはいかがでしょうか。

「慰霊の日」はよい機会かも知れません。

注①『沖縄』編者…米国陸軍省訳者…外間正四郎 一九九七年 光人社

注②『西原町史』第三巻「西原の戦時記録」西原町役場発行 一九八七年